

2022年度

K 2—2

国 語

2月25日(金)

人文社会科学部 (法学科)

16 : 25 ~ 17 : 15

【前期日程】

#### 注 意 事 項

##### 試験開始前

- 1 監督者の指示があるまで、問題冊子、解答用紙、下書き用紙に手を触れてはいけません。
- 2 監督者の指示に従って、全部の解答用紙(1枚)に受験番号を記入しなさい。

##### 試験開始後

- 3 この問題冊子は、4ページあります。はじめに、問題冊子、解答用紙、下書き用紙を確かめ、枚数の不足や、印刷の不鮮明なもの、ページの落丁・乱丁があった場合は、手をあげて監督者に申し出なさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。(下書き用紙と間違わないよう十分注意してください。下書き用紙は採点対象となりません。)
- 5 問題は、声を出して読んではいけません。
- 6 配点は、比率(%)で表示してあります。

##### 試験終了後

- 7 問題冊子と下書き用紙は、必ず持ち帰りなさい。

次の文章は、佐々木毅著『民主主義という不思議な仕組み』から一部を抜粋したものである。文章を読んで問題に答えなさい。なお、問題文を記載するにあたっては、原文を一部改めた。(配点四〇%)

新聞にほとんど毎月世論調査が載ります。すると、内閣の支持率の上昇や下降が話題になり、さらには個々の政策に対する世論の賛否が明らかになります。政治はそれを見ながら、運営されることになりました。しかし、ここで世論を代表して意見を聞かれているのは通常数千人規模の人々であり、一生に一度も世論調査の対象にならない国民が大多数と考えてよいのです。国民の大多数は、「自分は意見を聞かれたことがない」と感じています。ということは、世論調査なるものも「みなし」型の仕組みの一環であるということです。政党もかなり大規模の調査をしていますが、それでもこの現実はその大きさは変わらないのです。

さらに言えば、調査の質問の作り方によって、調査結果が影響を受けることも広く知られています。単純に言えば、設問の順番からして結果に影響がないわけではありません。通常、回答は一定の数の選択肢から選ぶ形で進められます。そのため、選択肢の言葉づかいや内容によって選択はある程度方向付けられることになります。一言で言えば、そこには調査する側による誘導の余地があるのです。

つまり、世論調査は世論を「鏡のように」映し出すものであるというよりは、一定程度調査する側の意図が反映する(「操作する」とまでは言わないとしても)可能性を含んでいるのです。一見精緻な調査に見えるものにも、こうした可能性が入り込む余地があるのです。また、「あれか、これか」の聞き方をすめるのか、それと並んで「どちらかと言うとあれ又はこれ」という回答を残すかで、結果のイメージが大きく変わってきます。本当は「あれか、これか」を聞きたくても、こうした調査は長期的なトレンドの変化に着目するものですので、一度設定した質問を簡単に変えるわけにはいかないのも実情です。その他、どの時点でどのような調査をするかも、調査する側の裁量があり、その政治的影響もそれによって大きく左右されることになりました。

こうした現実には「世論の支配」というものが決して単純なものではなく、中には相当に厄介な問題を抱えていることを示唆しています。民主政治が制度的に実現して以来、最も大きな議論の的になってきたのは、正に「世論の支配」の実態でした。「世論の支配」という言葉自身、世論というものが厳然として「存在」しているというイメージを反映しています。極端に言えば、世論はさながら一つのモノのような形で、その後光が四方八方に発射されているようなものとして「存在」しているといったイメージです。それは民主政治の光り輝く「(注)本尊」とでもいえるべきものです。

ここから、代表者たちがこの「(注)本尊」の意向を推察し、その指令を着実に実行に移すべきだという民主政治論が出てきます。代表は、代理にほとんど解消してしまうような「世論の支配」のイメージです。さらには、この「(注)本尊」は政策課題について正しい判断力を備えており、その忠実な実行は国民の利益に合致するという信念とも事実上結びついていました。

この光り輝く「本尊」の支配としての、「世論の支配」という考え方がどの程度あったのかはよく分かりませんが、そうした素朴な発想が民主政治論の中に流れ込んでいたことは事実です。しかし、政治の理論家の中で、こうした素朴な議論の信奉者が本当はどれ程いたかといえばそれは大いに疑わしいのです。人民主権の使徒とされるルソー<sup>(注2)</sup>にしても、人民がよく判断を誤ることに心を痛めましたし、ましてや「ザ・フェデリリスト」<sup>(注3)</sup>などからすれば、こうした民主政治のイメージは、「ないものねだり」の最たるものであったに違いありません。

十九世紀を代表する民主政治の理論家であった、J・S・ミル<sup>(注4)</sup>が最も警戒したのは、「世論の圧制」でした。従って、私が先に紹介したような「世論の支配」のイメージは、それを批判し、再吟味することを意図した理論家が「創作した」反対モデル(当然のことながら、マイナス・モデル)であるという疑いがあります。意地悪く言えば、自分の主張を際立たせるためには、その引立役の案山子<sup>(注5)</sup>が必要だったのではないのでしょうか。そうかどうかは読者の判断を仰ぐしかないのですが。

(中略)

十九世紀から二十世紀にかけて、民主化の結果として大衆(mass)が登場してきます。これはミルをはじめ多くの人々が心配していたように、合理的な政治判断を期待できない人々の登場を意味し、十九世紀の知識人が共通に抱いた警戒感でした。功利主義であれ何であれ、合理的な原則に基づいて大衆が判断することをどこまで期待できるか、これが二十世紀初頭の一つの中心的テーマだったのです。これは、人間をどこまで理性的な存在——目的(利害)と手段(政策)との関係について合理的に考える能力がある存在——と考えられるかということを意味しました。

心理学の登場という背景の中で、当時は人間の非合理性の「発見」が学界の一つの流行となっていました。そうした中で、政治の世界に見られる人間の実像を求める研究が始まります。そして、人間は目的と手段の関係を合理的に考えて政策を判断するような存在であるよりも、本能や衝動、性向、さらには習慣といったものによって支配されたものとして現われたのです。

彼らの分析によれば、現実政治においては、愛憎が大きな支配力を持ち、これに比べれば推論や討論はほとんど無力の状態です。そもそも言葉自身、人々の認識を高めるために使われるよりも、それを操作し、歪めるために使われています。ここでは、言葉は衝動へ訴えて人々を動員するために用いられているのであって、合理的な議論のための道具ではないのです。この「本能と衝動の束」のような大衆には、政治家の「旧友のような微笑」に受身的に反応することはできても、それを自らの判断に従ってコントロールする期待は持てません。政治家を自らの代表者としてコントロールするどころか、政治家たちによって「操作される」存在でしかありません。政治の現実がそうであるとすれば、「世論の支配」は無意味なものとなるのです。

リップマンの『世論』(一九二〇)という作品は、こうした二十世紀前半の「世論の支配」に対する幻滅の典型的な現れです。先に述べたような、後光の差した「本尊」としての人民、公衆の存在が、ここでは完膚<sup>(注6)</sup>なきまでに否定されます。人々が政治に興味を持つのは、スローガンか政治家でしかなく、複雑化

する政治環境について十分な情報を得た上で判断をするということは、全く期待できません。人間は「自己中心的」な存在であり、自分に関係のある事柄には合理的に判断することができませんが、政治は遠い世界の出来事であり、それについての認識や判断は心許なく、偏見や習慣によって支配されているといふわけです。

では、複雑化する政治について、十分な情報を得て合理的な判断を下すことができないのは、時間とお金がないためでしょうか。「それは違う」と彼は回答します。人間は複雑な物事については、「見ながら判断するのではなく、決定してから見る」という傾向を持っているからです。人間は複雑な物事を見る際に、一定のメガネ（これを彼はステレオタイプと呼びました）をかけて見て、判断を下します。ステレオタイプは人間が生まれると定着し始め、人間そのものと切っても切れないものとなるのです。そして、それが見ようとする対象の選択を予め決めてしまったために、複雑な現実を公平に冷静に、それ自身として観察するということは、人間には期待できないことになります。人間の知覚はステレオタイプに閉じ込められ、それによって知的エネルギーを節約し、見慣れたものを見て安心感を抱きます。ステレオタイプが支配する限り、世論は習慣や偏見と見慣れた世界から離れることができず、その合理性は到底期待できないのです。

新聞などのメディアは、ステレオタイプを補強することには役立っても、それから人間を解放する力を持ちません。人間は楽しみを味わうために新聞を読むのであって、ステレオタイプに一致しない新聞を読もうとしないからです。かくして、世論は合理的な人民の意志とは無縁なものであり、その真の製造元は政治指導者です。大衆は、政治指導者がステレオタイプを念頭にして選んだ選択肢に対して「イエスかノー」を言うだけであり、人民による自己統治という民主政治の原則は限りなく幻影に近づいていく、というわけです。

もし世論が、後光の差す「本尊」として存在しているのではなく、本来それに従うべき政治指導者が逆に「製造」したものであるとすれば、「世論の支配」は幻影に過ぎないものとなります。それは自己統治という幻影を振りまく点で、民主主義はかえって始末の悪いものになります。「世論の支配」が、いわば内側から崩壊してしまうからです。それと同時に、こうした議論は政治指導者の役割を積極的に認める方向へとつながっていきます。世論が「存在」するモノではなく、多かれ少なかれ「作られるもの」であるとすれば、それに関与する政治家集団のあり方、それらの間の競争条件などが重要になってきます。世論を「本尊」のように神聖化する発想は、政治家の役割を極めて受身的に考えてきましたが、それが大なり小なり逆転を始めます。問題はその逆転がどこまで及ぶかなのです。

〔出典 佐々木毅『民主主義という不思議な仕組み』ちくまプリマー新書、二〇〇七年、八九〜九八頁。〕

(注1) ご本尊 信仰の対象となる菩薩・仏。

(注2) ルソー 一八世紀フランスの思想家。

(注3) 『ザ・フェデラリスト』 アメリカ合衆国の建国時に合衆国憲法草案を擁護するために書かれた論文集。

(注4) J・S・ミル 一九世紀イギリスの哲学者。

(注5) リップマン 二〇世紀アメリカのジャーナリスト、政治評論家。

問題 「こうした現実には『世論の支配』というものが決して単純なものではなく、中には相当に厄介な問題を抱えていることを示唆しています」(傍線部)とあるが、「世論の支配」が抱える「厄介な問題」とはどのような問題か。本文の内容を踏まえつつ、具体例を挙げながら四〇〇字以上五〇〇字以内で説明しなさい。